The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『アンソニー・ギデンズの社会理論』 : その全体像と可能性
Author(s)	宮本, 孝二
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41071
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 2 】

氏　　名	宮（みや）　本（もと）　孝（こう）　二（じ）
博士の専攻分野の名称	博　　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　13397　号
学位授与年月日	平成 9 年 9 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	**『アンソニー・ギデンズの社会理論』 ―その全体像と可能性―**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　厚東　洋輔 （副査） 教 授　山口　節郎　　教 授　大村　英昭

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は，現代イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズの社会理論を，その展開過程に即して検討し全体像を明らかにするとともに，社会理論の 2 つの側面である一般理論すなわち社会学原論と，モダニティの社会理論すなわち現代社会論の発展に向けて，ギデンズ社会理論のもつ可能性を明らかにしようとするものである。

現代社会学は多くの専門領域に分化し，その全体的な統合性を失ってきている。しかし社会学は，古典的社会学者に見られるように，全体的な視野をもつその時代の現代社会論として発展してきた。また，現代社会論と密接な関連のもとに一般的な社会理論も構築されてきた。一般的な社会理論と，それに基礎づけられたモダニティの社会理論こそが社会学の本領ともいうべきものであろう。本稿が，ギデンズの社会理論の研究にもとづいて，社会学原論と現代社会論の発展を期することを目的としているのはそのためである。

序章「ギデンズ社会理論の全体像を求めて」では，ギデンズのこれまでの経歴と著作を概観するとともに，ギデンズ社会理論をめぐる議論の紹介と，その限界の指摘を行い，その限界を突破するためには，社会理論とは何かを明確に把握することが不可欠であることを主張する。次いで，社会理論を構成する社会学原論と現代社会論それぞれの基本的な構成と焦点となる問題を示し，社会理論の構築に向けての課題を明らかにする。

序章以降においては，その課題にこたえるために，70年代から現在に至るギデンズの主要著作の検討をもとに，ギデンズ社会理論の全体像と可能性を探究する。第 1 章が70年代，第 2 章と第 3 章が80年代，第 4 章と第 5 章が90年代にほぼ該当し，第 6 章と第 7 章が可能性の探求に当てられる。

第 1 章「ギデンズ社会理論の中心問題」では，ギデンズが本格的な著作活動を始めた70年代における社会理論の概要を紹介することによって，ギデンズ社会理論の基本構成と問題関心を示す。すなわち，まず構造化理論の形成史の原点にある階級構造化の理論枠組みを紹介し，次に構造化理論の基本的枠組みや，その提唱に随伴していた認識論的問題についての見解を紹介し，最後に構造化理論の構築過程において表明された問題関心を明らかにし，それ以降のギデンズの社会理論が展開していく出発点を確認する。

第 2 章「社会変動と国家パワー」は，80年代前半から中期にかけてパワー概念を基軸に展開された国家論および社会

変動論の概要を紹介し，その理論的基盤をなすパワー論の検討を進める。国家論や社会変動論は現代社会論と大きく重なるだけではなく，著作の位置づけとしては構造化理論の構築過程の所産となるため，本稿が構造化理論の中心として強調するパワー論の展開としてまとめているのである。特に，国家パワーによって立ち上げられる全体社会の構造を理論的に把握するために不可欠な，政治的パワーと経済的パワーとを区別する視点が，ギデンズ社会理論においてもつ重要性を指摘し，その区別の理論的根拠を明らかにする。

第3章「マクロ社会理論の展開の基本方向」は，80年代中期の著作をもとに，モダニティの社会理論を照準した一般的な社会理論としてのマクロ社会理論の展開の基本方向を明らかにする。社会学原論と現代社会論の重なりあうところであり，社会学原論としては，多元的で複合的で重層的な構造を理論的に把握する視点が確立したことが示され，現代社会論としては，社会変動を担うパワーとしての運動が中心概念として姿を現すことが示される。

第4章「ライフ・ポリティックスとモダニティ論」は，90年の『近代とはいかなる時代か？　モダニティの帰結』，91年の『モダニティと自己アイデンティティ』，そして92年の『親密性の変容』の内容を紹介し，90年代のギデンズ社会理論が開示し始めたモダニティの社会理論を検討する。第3章までに明らかにされた，パワー概念に基礎づけられた運動，コンフリクト，ポリティックスといった視点がそこに一貫していることが示される。

第5章「ラディカル・ポリティックスの時代」は，モダニティの社会理論の一応の総括ともいうべき，94年の『左右を超えて』の内容を紹介し，ギデンズが提示する新しい社会の構想の論点をまとめ，さらにそれをこれまでのギデンズ社会理論の展開の中に位置づける。

そして第6章と第7章において，全体像を踏まえつつ社会学原論と現代社会論の展開の可能性を明らかにする。第6章「ギデンズ社会理論の可能性(1)社会学原論」では，ギデンズ社会理論を社会学原論の新たな展開のために生かす可能性を，相互行為論やパワー論，構造論に焦点を合わせて検討し，第7章「ギデンズ社会理論の可能性(2)現代社会論」では，ギデンズ社会理論を現代社会論の新たな展開のために生かす可能性を，パワー論，アイデンティティ論，トレンド論について検討する。

こうして本稿全体を通じて，ギデンズ社会理論が統一的，体系的視点から描かれ，それに基づいて社会学原論および現代社会論が現在直面している諸問題を解決する方向が明示されることになる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，現在の社会学を代表する理論家の一人，アンソニー・ギデンズの学説を検討し，その全体像を描き出そうとした野心作である。「疾走し，増殖する」ギデンズを捉えるために，宮本氏は，極めて丹念な読解のスタイルを採用する一方，他方では，全体像を描き出すための基準点を「社会理論」に求め，社会分析のための概念枠組みの構築を目指す「社会学原論」及び現代がいかなる時代かを特徴づける「現代社会論」という二つの視角を用意する。

その結果，次の点が明らかにされる。(1)ギデンズ理論はほぼ1985年を画期に「社会学原論」から「モダニティー」論へと軸心が移動する。(2)「パワー」概念は終始一貫重要で，社会学原論では構造と行為を媒介し，現代社会論では国民国家形成とグローバリゼーションを媒介する運動論の支柱をなす。

こうしたギデンズ解釈は，これまでのギデンズ研究の一面性を確実に乗り越える画期的なもので，博士(人間科学)の学位に十分に値する業績といえる。